

研究ノート

「アダム・スミスの価値尺度論」に
ついての海外における諸研究（14）

—1970年代（その3）—

中 川 栄 治

序

わたくしは、主に今世紀に入ってから海外において発表されてきた「アダム・スミスの価値尺度論」に関する諸研究を整理する試みの一環として、本誌第4巻第1、第2、第3、第4号において、それぞれ、19世紀末から1910年代、1920年代、1930年代、1940年代に発表された個々の研究の内容を整理する試みを、本誌第5巻第2および第3号において1950年代に発表された個々の研究の内容を整理する試みを、また、本誌第6巻第1、第2、第3、第4号および第7巻第2号において1960年代に発表された個々の研究の内容を整理する試みを、なし、そしてそれについて、本誌第9巻第1および第3号では1970年代に発表されたいくつかの個々の研究の内容を整理しようとしてきた。

本稿は、前二稿にひきつづき、1970年代に海外において発表されかつわたくしがみることのできた個々の研究の内容を整理する試みの一部として、1970年代に出版されたM. ドップ (M. Dobb) およびM. ボウリー (M. Bowley) の各々の一著書のなかで示されている「アダム・スミスの価値尺度論」に関連をもつドップおよびボウリーの各々の所論の内容を整理

しようとするものである*。

(1) M. ドップ (1973)⁽¹⁾

ドップは、原版が1973年に出版された彼の著書においてつぎのような見方を示している。

① 『国富論』第1篇の第5章と、第6章の冒頭のところとの両方に、一つの労働自然価値説 (a labour theory of natural value) を示唆するものが存在することはたしかである。しかし、第5章でスミスが関心を払っているのは、価値の原因 (cause)、ないし「原則」(‘rule’)(すなわち、原理 (principle)) ではなくて、それでもって諸商品の価値およびその変化が的確に評価されうところの測定の標準なのである。価値の原因ないし「原則」(すなわち、原理) と価値測定の標準というこれら二つのものは、当時の考え方では密接に結びついていたけれども、またとくに後者は、前者に対するカギとみなされていたけれども、それらは、別個の、したがって分離することのできる問題なのである。ここでスミスの直接の関心事となっているのは、後者であって前者ではなかった⁽³⁾のである。

② スミスは、商品の交換価値は「それと交換に入手できる、労働の量かまたは他のある商品の量によって評価されるよりも、貨幣の量によって評価される場合がいつそう多い」(Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, edited...by Edwin Cannan, with an Introduction by Max Lerner, The Modern Library (New York: Random House, 1937)——以下、W. N. と略記する——, p. 32. 大河内一男監訳『国富論』(全3巻), 中央公論社, 1976年——以下、大河内訳と略記する, ただし、本稿で引用する引用文の訳は必ずしもこの大河内訳と一

* 諸研究の発表年度の区分は、本稿にききだつ諸稿におけるのと同様、著書の場合には、その原版もしくは初版が出版された年度に、あるいはその最初の著作権が成立した年度に、したがった。

致しない——〈I〉, 56ページ。)ということを読めたいので、さらに、貨幣は金や銀を採掘するのにかかる労働の量の変化に応じて、それ自体変化しうるものである(チューダー王朝期の大インフレーションを見よ)ことを指摘し、貨幣は正確な尺度ではありえない⁽⁴⁾、とする⁽⁵⁾。

③ スミスは、このように貨幣を退け、唯一可能な標準として労働に依拠する。そうすることにたいして彼が与えている理由は、あるいは、マーシャル的な用語法に翻訳して次のように言うことができよう。すなわち、それは、労働が経済活動に伴われる究極的な真実の費用(real cost)であり、したがって、貨幣商品としての貴金属をふくめてすべての商品の変動する価値がそれをタームとして測定されうる唯一の満足すべき標準であると主張しているに等しい、と⁽⁷⁾。

④ ところでスミスは、第5章のある箇所では、商品の生産にかかる労働の量と、その労働が市場で交換されるであろう価格(すなわち、マルクスが労働力の価値ないしは価格と名づけることになったもの)とを、きわめて明確に区別しているようにみえる〔そして、商品の高価や安価は前者のものに沿うとしている〕⁽⁸⁾のではあるが、他方でまたスミスは同じ第5章の、冒頭のパラグラフのなかで、「それ〔商品〕で彼が購買または支配できる労働の量」のことを、「あらゆる商品の交換価値の真の尺度」として述べている(W. N., p. 30. 大河内訳〈I〉, 52ページ。〔 〕内はドップ。)のであり、そしてこのことが、スミスは労働の価格(支払われる賃金という意味での)とある所与の生産物を生産するために必要とされる労働の量とを混同しており、したがってスミスは支配労働(labour-commanded)標準と投下労働(labour-embodied)標準との間で揺れ動いている、というリカードウの批判の根拠をなすこととなったのであった⁽⁹⁾。

⑤ なお、たしかに、この支配労働という概念は、標準(standard)あるいは尺度(measure)という脈絡のなかでは、「価格の一構成部分」という意味での価値の一原因としての賃金という概念に対応するものとみなすこともできよう⁽¹⁰⁾。そして、のちにリカードウとマルサスのあいだで鋭く

論議されることとなった支配労働と投下労働というこの二つの対照的な尺度は、もしも賃金 (wages) が生産された総価値のなかの割合として不変のままである (このことは、賃金の経時的な変化 (wage-changes over time) が労働生産性の変化と比例しているということを意味する) ならば (しかし、このときのみ)、明らかに同じ結果を生み出すであろう。¹¹⁾¹²⁾

⑥ ところで、スミスが、労働のタームでの価値尺度というこの考え方を、彼によってほめかされている意味のうちのどちらの意味においても、大いに活用したと言うことはできない。すなわち、それは生産物の比率的分割という問題に直接的に関連しているのであるから、たぶんそれは、分配という論題についてのもっと広範な探究という形で、生産物の比率的分割というその問題についてのなんらかの議論へと導くことになる、と期待できるであろう。だが、本当のところを言って、そのようなものを、われわれは見いださないのである。¹³⁾

(注)

- (1) ここでは、Maurice Dobb, *Theories of Value and Distribution since Adam Smith: Ideology and Economic Theory* (Cambridge: Cambridge University Press, ©1973, 1st paperback ed., 1975 (First published 1973))——以下、Dobb [1973] と略記する——〔岸本重陳訳『価値と分配の理論』(新評論, 1976年)〕のなかで示されているドップの所論をみる。その発表年度の区分については、著作権が成立し最初の上製版が出版された年度、1973年を記しておいた。
- (2) このことを示すものとして、ドップは、リカードウの『経済学および課税の原理』の第1章第6節「不変の価値尺度について」の冒頭に示されているこの二つの問題のあいだの結びつきということに関係するリカードウのつぎのような文章をあげている。「諸商品が相対価値において変動したばあいには、実質価値 (real value) においてどちらの商品が下落しどちらの商品が騰貴したかを確かめる手段をもつことが、望ましいであろう、そしてこのことは、これらの商品を、順次に価値のある不変の標準尺度、すなわち、それ自体は他の商品がこうむる変動をまったく受けてはならない尺度と比較することによってのみ、果たされうるであろう。」〔David Ricardo, *The Works and Correspondence of David Ricardo*, ed. Piero Sraffa, vol. 1: *On the Principles of Political Economy and Taxation* (Cambridge: Cambridge University Press, 1951)——以下、Ricardo, *Principles* と略記する

——, p. 43. P. スラッファ編『デイヴィッド・リカード全集』第1巻: 堀経夫訳『経済学および課税の原理』(雄松堂書店, 1972年), 49ページ。) Dobb [1973], p. 82. 邦訳, 101ページ。

なお、実質価値、絶対価値 (absolute value) を測定するものとしての不変の尺度についてのリカードの議論にたいするドップの検討については、Dobb [1973], pp. 82-84, 邦訳, 101-103ページを見よ。またそこには、そのような純理的な尺度あるいは不変の標準の探求といったことは、現代人にとっては、奇怪なこと、さらに、無意味なこととさえ思われがちであり、そのため、それはときとして、妄想的な問題としてあるいはさもなければおなじみの「指数問題」が古くさい衣裳をまとったものにすぎないとして退けられる、というドップの指摘が含まれている。

- (3) Dobb [1973], pp. 45, 47. 邦訳, 61, 63-64ページ。
- (4) ドップはつぎのようなスミスの文章を引用している。「人間の足の大きさとか、一尋^{ウツ}の長さとか、一握りの量とか、というようなそれ自身の量がたえず変動する量の尺度は、けっして他の物の量の正確な尺度とはなりえない。それと同じように、それ自身の価値がたえず変動するような商品も、他の諸商品の価値の正確な尺度とは、けっしてなりえない。」(*W. N.*, pp. 32-33. 大河内訳〈I〉, 57ページ。) Dobb [1973], pp. 47-48. 邦訳, 64ページ。
- (5) Dobb [1973], pp. 47-48. 邦訳, 64ページ。
- (6) スミスが与えている理由として、ドップはつぎのようなスミスの文章を引用している。「等量の労働は、時と場所のいかんを問わず、労働者にとっては等しい価値をもつものということができよう。彼の健康、体力、精神が普通の状態で、また彼の熟練と技能が通常であれば、彼はつねに、自分の安楽、自由、幸福の同一部分を犠牲にしなければならない。……それゆえ、それ自身の価値がけっして変動することのない労働だけが、すべての商品の価値を、時と場所のいかんを問わず、評価し比較することのできる究極で真の標準である。労働は、すべての商品の真実価格 (real price) であり、貨幣はその名目価格であるにすぎない。」(*W. N.*, p. 33. 大河内訳〈I〉, 57-58ページ。) Dobb [1973], p. 48. 邦訳, 64ページ。
- (7) Dobb [1973], p. 48. 邦訳, 64-65ページ。
- (8) このことを示すものとして、ドップは、つぎのような、本稿(1)の注6でみた一節と同一パラグラフに含まれるスミスの文章、および、その直後のパラグラフでのスミスの文章を、引用している。「彼〔労働者〕が支払う代価は、それと引き換えに彼が受け取る財貨の量がどうであろうと、つねに同一であるにちがいない。なるほど、その労働は、より大きな分量のこれらの財貨を購買することもあれば、より小さい分量のこれらの財貨を購買することもあろう。だが、変動するのは、

- それらの財貨の価値であって、それらを購買する労働の価値ではないのである。時と場所のいかんを問わず、得がたいもの、すなわち獲得するのに多くの労働が費やされるものは、高価であり、また容易に入手できるもの、すなわちわずかの労働で入手できるものは、安価である。」(W. N., p. 33. 大河内訳〈I〉, 57-58ページ。〔 〕内はドップ。)[しかしながら、等量の労働は、労働者にとってはつねに等しい価値をもつものではあるが、労働者を雇用する者にとっては、比較的大きい価値をもつようにみえることもあれば、比較的小さい価値をもつようにみえることもある。雇主は等量の労働を、あるときは比較的多量の、またあるときは比較少量の財貨で買うのであって、雇主にとっては、労働の価格は、他のすべての物の価格と同じように変動するように思われる。……けれどもじつは、財貨が、前者の場合に安価であり、後者の場合に高価であるのである。](W. N., p. 33. 大河内訳〈I〉, 58ページ。)Dobb [1973], pp. 48-49. 邦訳, 65ページ。
- (9) Dobb [1973], p. 49. 邦訳, 65-66ページ。ドップはリカードのつぎのような言葉を引用している。スミスは「交換価値の根源をこのように正確に定義した」のだけれども、彼は「みずから別の価値の標準尺度をたてた、……対象物の生産に投下された (bestowed) 労働の量ではなくて、それが市場において支配しうる労働の量という標準尺度である、あたかもこれら二つの表現が同意義のものであるかのように」。(Ricardo, *Principles*, pp. 13-14. 邦訳, 16ページ。) Dobb [1973], p. 49. 邦訳, 66ページ。
- (10) なお、ドップによれば、このような賃金の概念は、穀物が(賃金財として)他のすべての商品の価格の形成のうえで支配的な役割を果たすということに関する彼の系論の根拠として、スミスが採用したものであった、とされる。Dobb [1973], p. 49. 邦訳, 66ページ。
- (11) このことについてのドップの説明については、Dobb [1973], pp. 49-50n. §. 邦訳, 330ページ注32を見よ。なお、そこでのドップの説明は、いま本文でみたことの説明としてはつぎのような形で示すこともできるであろう。

ここでは、二つの期における、ある一定量の穀物の、支配労働と投下労働という二つの尺度によって測られる価値、といったことを例にとって考えてみることにしよう。いま、第1期および第2期の各々においてある一定の等しい量の穀物が生産される、とする。そして、その一定量の穀物を \bar{X} 、第1期においてその一定量の穀物のうちその生産に労働を投下した労働者の分け前となる穀物量部分を W_1 、第2期におけるそれを W_2 で示し、第1期における穀物タームでの労働1単位当たり賃金としての賃金率を w_1 、第2期におけるそれを w_2 で示し、また、第1期における労働1単位当たり穀物生産量(つまり一定量の穀物 \bar{X} の生産における労働生産性)を x_1 、第2期におけるそれを x_2 で示す、としよう。

そしていま、第1期においては、 \bar{X} の生産に労働を投下した労働者は \bar{X} とい

う生産物からその分け前を受け取るのであるがその分け前は \bar{X} のすべてではなかった、つまり、穀物タームでの賃金率(w_1)と \bar{X} の生産に投下された労働量との積である W_1 が、労働1単位当たり穀物生産量(x_1)と \bar{X} の生産に投下された労働量との積である \bar{X} よりも小さかった、したがって、穀物タームでの賃金率(w_1)が労働1単位当たり穀物生産量(x_1)よりも小さかった、とする。 $(0 < W_1 < \bar{X}, 0 < W_1/\bar{X} < 1, 0 < w_1 < x_1, 0 < w_1/x_1 < 1)$

この場合、第1期では、 \bar{X} の生産に投下された労働量は \bar{X}/x_1 となり、その量は \bar{X} の生産に労働を投下した労働者の分け前分となる穀物量部分を穀物タームでの賃金率で除したもので、つまり、 W_1/w_1 に対応し、他方、 \bar{X} の支配労働量は \bar{X}/w_1 となり、そして、 W_1/w_1 に等しい \bar{X}/x_1 は、 \bar{X}/w_1 よりも小、ということになる。つまり、 \bar{X} の投下労働量は、 \bar{X} の支配労働量よりも小さいのである。

さて、つぎに、第2期においては、等量の穀物 \bar{X} の生産において労働生産性が変化して労働1単位当たり穀物生産量が変化していた(その変化率を β で示す)、だが同時に、その一定量の穀物 \bar{X} にたいする、 \bar{X} のうちの労働者の分け前となる部分 W_2 の割合が、もとのままの一定割合(それを r^* で示す)に留まっていた(この場合には、生産される穀物量が \bar{X} で一定で、そのもとのままの一定割合が W_2 となるのであるから、 W_2 の大きさそのものはもとのままの W_1 に等しい)、つまり、労働生産性と同時に賃金率も変化しており(その変化率を α で示す)、しかもそれらは同一率で同一方向に変化しており($\beta = \alpha$, なお、 β, α が -1 あるいは -1 より小、すなわち、第2期における労働生産性ゼロあるいは負、第2期における賃金率ゼロあるいは負というのは無意味であるから、 $-1 < \beta, -1 < \alpha$)、変化後の賃金率と変化後の労働1単位当たり穀物生産量との割合も、もとのままの r^* であった、とする。 $(0 < W_1 = W_2 < \bar{X}, 0 < W_1/\bar{X} = W_2/\bar{X} = r^* < 1, 0 < w_1 < x_1, -1 < \alpha = \beta, 0 < w_1(1 + \alpha) = w_2 < x_1(1 + \beta) = x_2, 0 < w_1/x_1 = w_1(1 + \alpha)/x_1(1 + \beta) = w_2/x_2 = r^* < 1)$

この場合、第1期では \bar{X} に対応する投下労働量は $\bar{X}/x_1 = W_1/w_1$ 、支配労働量は \bar{X}/w_1 であったのにたいし、第2期では前者は $\bar{X}/x_1(1 + \beta) = W_2/w_1(1 + \alpha)$ (ただし $W_1 = W_2$)、後者は $\bar{X}/w_1(1 + \alpha)$ へと変化することになるのであり、 $0 < \bar{X}, 0 < w_1 < x_1, -1 < \alpha = \beta, 0 < w_1(1 + \alpha) < x_1(1 + \beta)$ であるから、第2期においても、 \bar{X} に対応する投下労働量は支配労働量よりも小さい、ということになる。しかしながら、第1期と第2期との間でのそれらの変化率ということについてはつぎのようなことが生じていることになるのである。

すなわち、まず、投下労働量の変化率は、 $\frac{\bar{X}/x_1(1 + \beta) - \bar{X}/x_1}{\bar{X}/x_1} =$

$$\frac{-\beta\bar{X}/x_1(1+\beta)}{\bar{X}/x_1} = -\beta/(1+\beta),$$
つまり、投下労働量は第1期と第2期との間で、

変化率 β での労働1単位当たり穀物生産量の変化と逆方向に、 $\beta/(1+\beta)$ の率で変化していることとなり、他方、支配労働量の変化率は、
$$\frac{\bar{X}/w_1(1+\alpha) - \bar{X}/w_1}{\bar{X}/w_1} =$$

$$\frac{-\alpha\bar{X}/w_1(1+\alpha)}{\bar{X}/w_1} = -\alpha/(1+\alpha),$$
つまり、支配労働量は第1期と第2期との間で、

変化率 α での賃金率の変化と逆方向に、 $\alpha/(1+\alpha)$ の率で変化していることになるのであるが、そのさい $-1 < \alpha = \beta$ であるため、それらの変化率は等しい、ということになるのである。たとえば、労働生産性と賃金率とがともに100%の率で上昇し、第2期においては労働生産性と賃金率とがともに第1期でのものの2倍になっているとすれば $(x_1(1+\beta), w_1(1+\alpha))$ において $\alpha = \beta = 1$ 、第2期では、 \bar{X} に対応する投下労働量も支配労働量もともに50%の率で減少しており、第1期でのそれらの1/2だけ減少している、ということになるのである(投下労働量の変化

については、 β が1であるゆえ、 $-\beta\bar{X}/x_1(1+\beta) = (-\beta/1+\beta)(\bar{X}/x_1) = -\frac{1}{2}(\bar{X}/x_1)$,

支配労働量の変化については、 α が1であるゆえ、 $-\alpha\bar{X}/w_1(1+\alpha) = (-\alpha/1+\alpha)(\bar{X}/w_1) = -\frac{1}{2}(\bar{X}/w_1)$ 。つまり、 \bar{X} の価値は、投下労働で測っても、支配労働で測っても、同じ率で変化した、ということになるのである。

これにたいし、いまもし、第2期において、等量の穀物 \bar{X} の生産において労働生産性が変化して労働1単位当たり穀物生産量が変化し、さらに同時に、 \bar{X} にたいする、 \bar{X} のうちの労働者の受け取った分け前部分 W_2 の割合も第1期における割合と異なっていたならば(この場合には、生産される穀物量が \bar{X} で一定で、その穀物量にたいする労働者の分け前分となる穀物量部分の割合が変化するのであるから、労働者の分け前分にあたる穀物量そのものが変化したこととなり、 $W_1 \neq W_2$ ということとなるのであるが、そのさい、その W_2 の上限は \bar{X} であるから、 $0 < W_2 \leq \bar{X}$ 、ということとなる)、つまり、賃金率と労働生産性とが同一の率で変化せず($-1 < \alpha$, $-1 < \beta$, $\alpha \neq \beta$)、第2期での賃金率と労働1単位当たり穀物生産量との割合が第1期でのそれと異なっていたならば、($0 < W_1 < \bar{X}$, $0 < W_1/\bar{X} = r^* < 1$, $0 < W_2 \leq \bar{X}$, $0 < W_2/\bar{X} \leq 1$, $W_1/\bar{X} \neq W_2/\bar{X}$, $-1 < \alpha$, $-1 < \beta$, $\alpha \neq \beta$, $0 < w_1(1+\alpha) = w_2 \leq x_1(1+\beta) = x_2$, $0 < w_1/x_1 = r^* < 1$, $0 < w_1(1+\alpha)/x_1(1+\beta) \leq 1$, $w_1/x_1 \neq w_1(1+\alpha)/x_1(1+\beta)$)ならば、) そのときには、どのようなことになるのか。

この場合にも、第2期では \bar{X} に対応する投下労働量は $\bar{X}/x_1(1+\beta) = W_2/w_1(1+\alpha)$ (ただし $W_1 \neq W_2$)、支配労働量は $\bar{X}/w_1(1+\alpha)$ 、ということになる。

しかしここでは、もし変化後の労働1単位当たり穀物生産量と変化後の賃金率とが等しくなるならば($0 < x_1(1+\beta) = w_1(1+\alpha)$, ならば)——したがって、 $0 < W_2 = \bar{X}$, となるならば——, そのときには、第2期では \bar{X} に対応する投下労働量と支配労働量とが等しいということになり、他方、 $x_1(1+\beta) > w_1(1+\alpha) > 0$, のときには——したがって、 $\bar{X} > W_2 > 0$ のときには、第2期では \bar{X} に対応する投下労働量は支配労働量よりも小、ということになるのである。

では、第1期と第2期との間での \bar{X} に対応する投下労働量および支配労働量の変化率についてはどうか。ここでも、投下労働量の変化率は $-\beta/(1+\beta)$, 支配労働量の変化率は $-\alpha/(1+\alpha)$, となる。しかしここでは、 $-1 < \alpha$, $-1 < \beta$, $\alpha \neq \beta$ であるため、それらの率は等しくはならないのである。

ある量の生産物の支配労働量の経時的な変化率と投下労働量の経時的な変化率とは、その生産物を生産するさいの労働1単位当たり生産物量としての労働生産性の経時的な変化率とその生産物の生産に労働を投下する労働者の労働1単位当たり賃金としての賃金率の経時的な変化率とが等しい——それゆえ、労働生産性にたいする賃金率の割合は経時的に不変——とき、したがって、その生産物全量のうちのその生産に労働を投下した労働者の分け前分となる部分としての賃金総額が、その生産物全量にたいして、経時的に不変な割合を占めるとき、またそのときにのみ、一致する。支配労働と投下労働という二つの尺度は、もしも賃金〔賃金部分〕が生産された総価値のなかの割合として不変のままである（このことは、賃金〔賃金率〕の経時的な変化が労働生産性の変化と比例しているということの意味する）ならば（しかし、このときにのみ）、同じ結果を生み出すのである。

そしてまた、うえてみたことからわかるように、もし、ある量の生産物の生産に労働を投下する労働者がそれだけの量の生産物の全量にあたるものを受け取ってしまうならば、つまり、賃金率が労働生産性に等しいならば、そのときには、その量のその生産物に対応する支配労働量と投下労働量とは等しくなるのであり、そしてそのような条件がつねに満たされるときには、支配労働量と投下労働量とがつねに一致する、ということになる。すなわち、そのときには、支配労働量自体の大きさ、投下労働量自体の大きさに経時的な変化があつたとしても、変化後の支配労働量の大きさと変化後の投下労働量の大きさはつねに一致しているのであり、したがってまたそこでは当然、支配労働量の変化率と投下労働量の変化率、支配労働量の変化量と投下労働量の変化量とは、つねに一致しているのである。（うへの例でいえば、第1期の \bar{X} の支配労働量は \bar{X}/w_1 , 第1期の \bar{X} の投下労働量は $\bar{X}/x_1 = W_1/w_1$, 第2期の \bar{X} の支配労働量は $\bar{X}/w_2 = \bar{X}/w_1(1+\alpha)$, 第2期の \bar{X} の投下労働量は $\bar{X}/x_2 = \bar{X}/x_1(1+\beta) = W_2/w_2 = W_2/w_1(1+\alpha)$, 第1期と第2期との間での \bar{X} の支配労働量の変化率は $-\alpha/(1+\alpha)$ ——

$\frac{\bar{X}/w_1(1+\alpha)-\bar{X}/w_1}{\bar{X}/w_1}$ ——, 第1期と第2期との間での \bar{X} の投下労働量の変化率

は $-\beta/(1+\beta)$ —— $\frac{\bar{X}/x_1(1+\beta)-\bar{X}/x_1}{\bar{X}/x_1}$ ——, 第1期と第2期との間での \bar{X} の

支配労働量の変化量は $(-\alpha/1+\alpha)(\bar{X}/w_1)$ —— $\bar{X}/w_1(1+\alpha)-\bar{X}/w_1$ ——, 第1期と第2期との間での投下労働量の変化量は $(-\beta/1+\beta)(\bar{X}/x_1)$ —— $\bar{X}/x_1(1+\beta)-\bar{X}/x_1$ ——, において, $0 < W_1 = W_2 = \bar{X}$, $0 < W_1/\bar{X} = W_2/\bar{X} = 1$, $0 < w_1 = x_1$, $-1 < \alpha = \beta$, $0 < w_1(1+\alpha) = w_2 = x_1(1+\beta) = x_2$, $w_1/x_1 = w_2/x_2 = 1$ つまり, ここでは, 支配労働で測られた価値の経時的な変化率と投下労働で測られた価値の経時的な変化率とが一致するだけでなく, 支配労働で測られた価値の大きさと投下労働で測られた価値の大きさ, 支配労働で測られた価値の経時的な変化の大きさと投下労働で測られた価値の経時的な変化の大きさ, は, つねに, 一致するのである。

(12) Dobb [1973], p. 49. 邦訳, 66ページ。なお, ドップはまた, つぎのような指摘をくわえている。すなわち, 他方, 価格あるいは交換価値の形成のための因果関係的な原則あるいは原理という脈絡においては, 賃金説と投下労働説 (embodied-labour theory) とは, もし資本に対する労働の比率がしたがってまた利潤に対する賃金の比率があらゆる生産部面で均等であるならば (しかし, このときのみ), (地代を無視すれば) 等しくなるであろう。Dobb [1973], pp. 49-50. 邦訳, 66ページ。

(13) Dobb [1973], p. 50. 邦訳, 66-67ページ。

M. ドップ (1973) についての覚書

ドップによれば, スミスやカードウの時代の考え方においては価値の原因ないし「^ル原則」(すなわち原理)と価値測定の標準とは密接に結びついたものであり, またとくに後者は前者に対するカギとみなされていたのではあるけれども, それらは別個の, したがって分離することのできる問題であるのであり, そして, 『国富論』第1篇第5章においてスミスの直接の関心事となっていたものは後者であって前者ではなかったのである, とされるのであった。

そしてドップによれば, スミスは, 貨幣は正確な価値尺度ではありえな

いとし、労働が唯一可能な尺度であるとした、そして、そうすることに対してスミスが与えた理由は事実上、労働が経済活動に伴われる究極的な現実の費用であるということであった、とされるのであった。

なお、ドップによれば、スミスの議論には商品の生産にかかる労働の量と、その労働が市場で交換されるであろう価格とを明確に区別しているように思える箇所があるのであり、そこでは労働と引き換えに受け取られる商品の量いかにかわらず〔したがって、逆に、商品が支配しうる労働の量いかにかわらず〕獲得するのに多くの労働が費やされるものは高価であるとされているのであるが、他方でまたスミスはあらゆる商品の交換価値の真の尺度はそれらの商品で購買しうる労働の量であるとしているのであり、このことが、スミスは労働の価格（支払われる賃金という意味での）とある所与の生産物を生産するために必要とされる労働の量とを混同しており、したがってスミスは支配労働標準と投下労働標準との間で揺れ動いているというリカードウの批判の根拠をなすこととなった、とみられるのであった。ただし、ドップによれば、標準あるいは尺度の脈絡のなかでは支配労働という概念は、「価格の一構成部分」という意味での価値の一原因としての賃金という概念に対応するものとみなすことはできるのであり、そして、尺度としてみたばあいの支配労働と投下労働は、賃金〔賃金部分〕が生産された総価値のなかの割合として不変のままであるとき、またそのときにのみ、〔支配労働で測られた価値の経時的な変化の率と投下労働で測られた価値の経時的な変化の率との一致、という意味で〕同じ結果をもたらすであろう、とされるのであった。〔なお、もし生産された総価値にたいする、そのうちの賃金部分の割合が1で不変のままであるときには、支配労働で測られた価値の経時的な変化率と投下労働で測られた価値の経時的な変化率が一致するだけでなく、支配労働で測られた価値の大きさや投下労働で測られた価値の大きさ、支配労働で測られた価値の経時的な変化の大きさや投下労働で測られた価値の経時的な変化の大きさ、は、つねに、一致することとなる。〕

他方またドップによれば、労働を価値尺度とするスミスのこういった議論そのものは生産物の比率的分割という問題と関連をもつものであるはずであるにもかかわらず、スミスは、彼がほのめかしている支配労働の意味での労働であれ投下労働の意味での労働であれ労働を価値尺度としようというこの考え方そのものを、十分にそのような問題と関連づけて議論を展開したわけではなかった、とされるのであった。

(2) M. ボウリー (1973)⁽¹⁾

ボウリーは、1973年の著書において、E. キャンンの編集した『グラスゴウ大学講義』では、貨幣が価値の尺度としてまた交換の媒介物として発達してきた道すじについての長い議論〔第2部第2篇第8節〕——なぜ貨幣自体の価値が変化してきたのかということについての考察も含んだ議論——のあとでただついでにのみ価値尺度としての労働が言及されているが、労働価値説の痕跡を示すようなものはなにもなく、キャンンが「国民の富裕は貨幣に存するのではないということ」という表題をつけた節〔第9節〕の冒頭の「われわれは貨幣を価値の尺度たらしめたのは何であるかを示した。しかし注意すべきは、貨幣ではなく労働が、価値のほんとうの尺度であるということである。したがって国民の富裕 (national opulence) は財貨の量と交換の容易さに存する⁽²⁾」という文章における、価値のほんとうの尺度としての労働へのこの謎めいた言及が、価値との関連における労働への『グラスゴウ大学講義』での唯一の言及である、ということを描したうえで、『国富論』での価値・価格に関するスミスの議論をとりあげるのであるが、そのなかで、スミスの価値尺度についての議論に関連してつぎのような見解を示している。

〔I〕 スミスは『国富論』第1篇第4章の終わりのところにおいて、諸財貨の交換価値は、それらの財貨の効用 (utility) あるいは有用性 (usefulness) すなわち「使用価値」——ただし、必需品に対する欲求、便

益品に対する欲求、および贅沢品に対する欲求の間に区別をなしそして諸財貨が満足させることのできる欲求の種類ということに従って諸財貨の有用性あるいは効用に等級をつける道徳家 (moralists) や素人の、普通のあるいは通常の意味でのそれ——には、一致しない、ということを指摘したうえで、交換価値について三つの問題⁽⁴⁾を列挙している。ところで、従来、『国富論』における真実価格と名目価格についての章および価格の構成部分についての章 (第1篇第5章および第6章) と自然価格と市場価格についての章 (第1篇第7章) との間の関係は不当に無視されてきたが、これら三つの章は、第4章の終わりのところで列挙された価値の諸問題についての一つの統合的な検討たることを意図されており、また、そのようなものとして考えられるべきなのであり、そして、第5章「商品の真実価格と名目価格について、すなわち、商品の労働での価格と商品の貨幣での価格について」は、まさにそうであると称するもの、すなわち、真実価格と貨幣価格との間の違いおよび価値測定の問題についての議論なのである。⁽⁵⁾

〔Ⅱ〕 そのような問題を取り扱う第5章では、投入実体 (physical inputs) は価値尺度としては退けられており、第5章はまた、付随的に、スミスが供給にとっての諸障害ということに大きな関心を払ったということにたいする説明を投じているのであるが、第5章でのスミスの議論はつぎのようなものとして把握することができる。⁽⁶⁾

① まず、第5章の「商品の真実価格と名目価格について、すなわち、商品の労働での価格と商品の貨幣での価格について」という表題は、交換価値のほんとうの尺度は労働であるという『グラスゴウ大学講義』の謎めいた言説からの一つの発展を示唆している。⁽⁷⁾

② そして、第5章の冒頭のパラグラフは、なぜ貨幣ではなく労働がすべての商品の交換価値の真の尺度であるのかということについてのスミスの説明を、提供している⁽⁸⁾のであるが、そこでのスミスの考え方はつぎのように要約できる。すなわち、人は、彼が享受することのできる生活の必需品、便益品および娯楽品の量に応じて、富んでいる。ところで、分業が「ひ

とたび徹底的に行きわたるようになった」あとでは、人が、彼の直接の労働によって彼自身に供給しうるのは非常に限られた程度のものであるということになるであろう。かくして、彼の富は、彼がどれほど多くの他人の労働を支配あるいは購買しうるかということに、依存することとなるであろう。このことからスミスは、所有者みずから使用しようとは思っていない商品は、その商品の所有者にとっては、その商品と交換に彼が獲得することのできる労働の量、「その商品で彼が購買または支配できる労働の量」(W. N., p. 30. 大河内訳〈I〉, 52ページ。)だけの値うちがある、という結論を下す。このように、最初からスミスの関心は、投下労働 (labour input) にはではなく支配労働 (labour commanded) にあるのである。⁽⁹⁾

③ スミスは、第5章の冒頭のパラグラフの最後で、「それゆえ、労働はすべての商品の交換価値の真の尺度である」(W. N., p. 30. 大河内訳〈I〉, 52ページ。), と述べ、さらに、つづく第2パラグラフで彼の議論を展開するのであるが、⁽¹⁰⁾そこで示されているものは、価値尺度の支配労働説についての慎重な言説である。そしてそこにふくまれている「それらはある一定量の労働の価値をふくんでおり」ではじまるセンテンスのみが投下労働が支配労働に影響を及ぼすかもしれないということを示唆してはいるけれども、財貨は、それを生産するのに労働が必要であるがゆえに、価値をもつのだ、といった言説は、どこにも存在しないのである。また、スミスが価値の尺度となるものとみなしているものは、一つの自然的資源としての労働ではなく、「労苦と骨折り」と同義のものとしての労働であるということに注目することも、重要である。⁽¹¹⁾

④ スミスは、苦痛を伴うものとしてのすなわち一つの不効用としての労働という考えを説明しつつ、そうして、労働の苦痛が、富を獲得することの基本的なコストあるいは代価ということになり、かくしてスミスは、不効用——商品を労働支配力と交換できることによってはぶかれる労働の不効用——という不変の単位といったタームでの価値の絶対的尺度を、⁽¹²⁾手に入れるのである。

⑤ なお、スミスは異なったタイプの労働は異なった苦痛コストを伴うということ、また、関係するその労働の辛さや巧妙さについてのなにか正確な尺度を見いだすことは容易でないということ、を指摘している。他方スミスはつづけて、正当化のための見せかけの試み以上のことをなすことなしに、つぎのような主張をする。すなわち、実際には、市場と慣習が、熟練等々を獲得するのに伴う労働を考慮に入れて、異種類労働の諸量の間の換算物差しを確立するであろう、ということである。⁽¹³⁾

⑥ なお、スミスはさらに、労働をして不変の価値尺度にしているところの労働の不効用についての叙述あるいは説明をなしてその不効用の不変性を指摘し、⁽¹⁴⁾そして、労働のみがあらゆる時と場所においてすべての商品の価値を評価し比較するための究極で真の標準であることを結論づけるのであるが、⁽¹⁵⁾スミスはさらにすすんで、労働は貨幣のタームでの名目価格とその貨幣がどんな財貨を購入するかといったタームでの実質価格 (real price) とを持つであろうということ、しかし、労働のこのような名目価格も実質価格も必ずしも、労苦と骨折りのタームでの労働者にとってのコストとはなんらかの密接な関係をもつわけではないということ、を指摘する。スミスの議論においては、労働者にとっての労働のこの不変な苦痛コストは、通常の意味での、貨幣賃金とか実質賃金とは無関係な尺度なのであり、またそれは、労働〔者たち〕の生存費とはまったく関係のないものである。⁽¹⁶⁾

⑦ スミスは第5章において以上でみたような議論を展開したのであるが、彼は、その章の残りの部分を主に、なんらかの特定の時点においてあるいは特定の期間 (period) にわたって貨幣での労働の価格あるいは穀物での労働の価格が一定でありうるかぎりにおいて一方で貨幣が、あるいは、他方で穀物が近似的な価値尺度として使用されうる事情についての説明に、あてた。スミスは、たとえばつぎのことを指摘した。すなわち、異なる時代 (different periods) のあいだでは、等量の穀物は、等量の金や銀よりも、ヨリいっそう、等量の労働を購入しそうであり、また、穀物価格は

年から年にかけては著しく変動する傾向があるために、短期間についてはそれとは逆のことがいえる、ということである。⁽¹⁷⁾

〔Ⅲ〕 以上の第5章でのスミスの議論に関連して以下のような点が指摘されるべきである。

① 以上の第5章でのスミスの議論のなかには、投下労働がもしかすると支配労働に影響を及ぼすかもしれないという示唆は存在するが、それとは別個なものとしての、投下労働が価値の一尺度を提供するといった示唆は存在しはしない。⁽¹⁸⁾

② 労働をして不変の価値尺度たらしめる不変な労働不効用というスミスの考えは、古典派の経済学一般に受け入れられたわけではなかった。⁽¹⁹⁾ また、さまざまな理由から古典派の経済学者たちにとって非常に重要なことのように思われた不変の価値尺度あるいは不変の価値標準の追求は、理想的ではあるが実現不可能な妙案 (philosopher's stone) あるいはなにか他の実現不可能な夢 (chimera) の追求といったことといかにも似たり寄ったりのものであったため、経済思想史家たちは、それをめぐる諸論争には近寄らないようにしてきたのであり、そして、スミスが価値尺度として労働の不効用という心理的な概念を提案したことの斬新さが経済思想史家たちからの注目をほとんど受けてこなかったのは、たぶん、このためである。⁽²⁰⁾⁽²¹⁾

③ スミスは、もともと、価値の基礎としても価値測定の基礎としても投入実体に関心を怠っていたわけではなかった。⁽²²⁾

④ スミスはまた、個人の労働供給曲線が逆傾斜になるという意見に対する彼の批判——スミス自身の賃金理論にとってもっとも重要なものであるところの彼の批判——で、労働の不効用というその考えを〔価値尺度といったこととは〕別の目的のために使用したのであり、そしてまた、ジェヴォンズは、個人の労働供給ということとの関連で、労働の苦痛コストというスミスの考えの意義を認めていたのであった。⁽²³⁾

⑤ だが、スミスの労働の苦痛コストというものは、賃金および労働供給の理論といったものをこえて影響力をもつものであった。すなわちそれ

は、貯蓄に伴う「真実の」犠牲もしくは不効用——これは、労働者にとっての労働の不効用といったことに対応するものであろう——を指すものとしての「制欲」(‘abstinence’) というものをシーニョアが導入しているといったことから例証されるように、イギリス経済学の「真実の」費用(‘real’ cost) という伝統的な考え方の基礎を、提供したのであった。⁽²⁴⁾

(注)

- (1) ここでは, Marian Bowley, *Studies in the History of Economic Theory before 1870* (London: Macmillan, 1973)——以下, Bowley [1973] と略記する——のなかで示されているボウリーの所論をみる。
- (2) Adam Smith, *Lectures on Justice, Police, Revenue and Arms: Delivered in the University of Glasgow by Adam Smith, Reported by a Student in 1763*, edited with an Introduction and Notes by Edwin Cannan (Oxford: Clarendon Press, 1896; reprint ed., New York: Augustus M. Kelley, Bookseller, 1964), p. 190. 高島善哉, 水田洋訳『アダム・スミス グラスゴウ大学講義』(日本評論社, 1947年), 364 ページ。
- (3) Bowley [1973], p. 110.
- (4) ボウリーはつぎのスミスの文章を引用している。「第一に、この交換価値の真の尺度はなんであるか、すなわち、すべての商品の真実価格 (real price) はいったいなにに存するか。／第二に、この真実価格を構成し、あるいはつくりあげているさまざまな部分とはどんなものであるか。／そして最後に、価格のこうしたさまざまな部分のいくつか、またはすべてを、ときにはその自然率ないし通常率以上に引き上げ、またときにはそれ以下に引き下げるさまざまな事情とはどんなものであるか。あるいは、諸商品の市場価格すなわち現実の価格がそれらの自然価格とよべるものと正確に一致するのをときとして妨げる諸原因は、いったいどんなものであるのか。」(W. N., pp. 28-29. 大河内訳〈I〉, 50ページ。／は原典において行変えが行われていることを示す。以下同様。) Bowley [1973], p. 111.
- (5) Bowley [1973], pp. 110-111.
- (6) Bowley [1973], p. 111.
- (7) Bowley [1973], p. 112.
- (8) なお、ボウリーによれば、そのスミスの考えは、たとえばベティ、ロック、カントロン、ジョウゼフ・ハリスさらにサー・ジェイムズ・ステュアートといったような多くの17世紀および18世紀の作家たちによって土地の自然的な諸資源から富を創造する手段として労働の重要性が強調されてきたのであるが、そのよ

うな伝統に起源をもっており、そのような伝統のなかにある考えをスミスなりにとらえなおしたものである、とされる。Bowley [1973], p. 112.

- (9) Bowley [1973], pp. 112-113.
- (10) ボウリーは、本文で引用された第5章の冒頭のパラグラフの最後の文章につづく第2パラグラフの全体を引用している。そのパラグラフはつぎのようなものである。「あらゆる物の真実価格、すなわち、どんな物でも人がそれを獲得しようとするにあたって本当に費やすものは、それを獲得するための労苦と骨折りでである。あらゆる物が、それを獲得した人にとって、またそれを売りさばいたり他のなにかと交換したりしようと思う人にとって、真にどれほどの値うちがあるかといえ、それによって彼自身ははぶくことができ、また、それによって他の人々に課することができる労苦と骨折りでである。貨幣または財貨で買われるものは、われわれが自分の肉体的労苦によって獲得するものとまったく同じように、労働によって購買されるのである。その貨幣、またはそれらの財貨は、事実、この労苦をわれわれからはぶいてくれる。それらはある一定量の労働の価値をふくんでおり、その一定量の労働の価値をわれわれは、そのときそれと等しい労働量の価値をふくんでいるとみなされるものと交換するのである。労働こそは、すべての物にたいして支払われた最初の代価、本来の購買貨幣であった。世界のすべての富が最初に購買されたのは、金や銀によってではなく、労働によってである。そしてその富の価値は、この富を所有し、それをある新しい生産物と交換しようと思う人たちにとっては、そうした人たちがそれで購買または支配できる労働の量に正確に等しいのである。」(W. N., pp. 30-31. 大河内訳〈I〉, 52-53ページ。) Bowley [1973], p. 113.
- (11) Bowley [1973], p. 113.
- (12) Bowley [1973], p. 113.
- (13) Bowley [1973], pp. 113-114. なお、ボウリーによれば、この場合、換算物差しのために慣習や市場諸力を当てにすることは疑わしい妥当性しかもたないように思えるのであって、それを正当化するためには少なくとも、不効用理論への迂回が必要である、とされる。Bowley [1973], p. 114n. 17. また、ボウリーは、換算物差しについてのこの説明においてスミスは不思議にも『国富論』第1篇]第10章での異種類労働の評価についてはるかにヨリ詳細な検討にんの言及もしていない、としている。Bowley [1973], p. 114.
- (14) ボウリーはつぎのようなスミスの文章を引用している。「等量の労働は、時と場所のいかんを問わず、労働者にとっては等しい価値をもつものということができよう。彼の健康、体力、精神が普通の状態で、また彼の熟練と技能が通常程度であれば、彼はつねに、自分の安楽、自由、幸福の同一部分を犠牲にしなければならぬ。彼が支払う代価は、それと引き換えに彼が受け取る財貨の量がどう

であろうと、つねに同一であるにちがいない。」(W. N., p. 33. 大河内訳〈I〉, 57ページ。) Bowley [1973], p. 114.

- (15) ボウリーはつぎのようなスミスの文章を引用している。「それゆえ、それ自身の価値がけっして変動することのない労働だけが、すべての商品の価値を、時と場所のいかんを問わず、評価し比較することのできる究極で真の標準である。労働は、すべての商品の真実価格 (real price) であり、貨幣はその名目価格であるにすぎない。／しかしながら、等量の労働は、労働者にとってはつねに等しい価値をもつのではあるが、労働者を雇用する者にとっては、比較的大きい価値をもつようにみえることもあれば、比較的小さい価値をもつようにみえることもある。」(W. N., p. 33. 大河内訳〈I〉, 58ページ。) Bowley [1973], p. 114.
- (16) Bowley [1973], pp. 114-115. さらにつづけてボウリーはつぎのような指摘をなしている。すなわち、スミスは、労働者にとって労働はある不変の不効用をもつがゆえに価値のほんとうの尺度は労働であるのだということを認識する人はほとんどいないであろうということを、認めている。ほとんどの人々にとっては、財貨の価値は、その財貨の貨幣価格によってかあるいはその財貨と交換に与えられる他の財貨の量によって示されるのであり、そしてまた、これらのものは、その財貨によって支配される労働量にたいしては、貨幣賃金率の変動に応じてまた実質賃金率の変動に応じて、異なった関係をもつこととなるであろう。Bowley [1973], p. 115.
- (17) Bowley [1973], p. 115.
- (18) Bowley [1973], p. 115. なお、ボウリーによれば、投下労働 (labour input) が支配労働に影響を及ぼすかもしれないというスミスの示唆は、その時々貴金属によって支配される労働の変動についての説明のなかでさらに展開されており (W. N., p. 32. 大河内訳〈I〉, 57ページ。), そしてそこで与えられている説明とは、異なる時点において利用可能な諸鉱山はその豊度において異なる、またそれゆえ貴金属を生産するのに必要とされる労働投入 (labour input) もまた異なる、というものである、とされる。また、ボウリーは、投下労働と支配労働が等しくなるような実際の状況は、それにつづく価格の構成部分についての章〔第6章〕で述べられている、ということを指摘している。Bowley [1973], p. 115.
- (19) このことに関してボウリーはつぎのような説明をくわえている。すなわち、たとえばマルサスは、不変の労働不効用ということを主張した点でスミスは厳密に正しかった、とは考えなかったのであり、マルサスはなにかんづく、スミスが「真実の」(‘real’)という言葉を故意に二つの意味で使用したことが混乱をひきおこしたということ、を、指摘したのであった。しかしながら、マルサスの場合には、スミスの「支配労働」は、それが「あらゆる他の原因を包含する価値の最高原因、すなわち需要と比較した供給の状態」を測定するという理由から、最善の価値尺

度として、受け入れられるのであった。他方、リカードは、自分とスミスは異なった目的のために不変の価値尺度を欲したのだということを認識することなしに、スミスの考えを退けた。それゆえリカードは、労働不効用は不変であるのかあるいはまた労働不効用はスミス自身の問題にとって適切なものであるのかといったことは考えはしなかった。リカードは、その時々^にに支払われる実際の賃金のターム^{でも}でもまた生存費という見地からの労働の生産費のターム^{でも}でも、労働自体は価値において変化するということから、スミスの「支配労働」価値尺度を退けたのであった。しかしながら実際には、スミスは、労働の賃金という見地からみた労働は価値において変化するということを認めていたのであり、また事実、そのことを述べていたのであった。スミスが主張したこと、そして当然リカードが受け入れえなかったことは、つぎのことであった。すなわち、労働そのものにたいして支払われる価格の可変性も労働そのものを生産する費用の可変性も、労働が価値尺度に適しているということには影響を及ぼしはしない、ということである。スミスの見解においては、あらゆる特定の時点において労働に対してたまたま支払われるものとは関係なく労働をして価値の標準たらしめるものは、人間にとっての労働の現実に不変な不効用なのであった。Bowley [1973], pp. 115-116, p. 115n. 18.

(20) なお、ボウリーは、そのことに注意を向けさせている比較的数少ない研究の例として、われわれが本稿に先立つ諸稿でとりあげたH. M. ロバートソンとW. L. テイラーの共同論文(H. M. Robertson and W. L. Taylor, "Adam Smith's Approach to the Theory of Value," *Economic Journal*, vol. 67 (no. 266, June 1957).)とV. W. ブレイドゥンの研究(V. W. Bladen, "Adam Smith on Value," in *Essays in Political Economy in Honour of E. J. Urwick*, ed. H. A. Innis (Toronto: University of Toronto Press, 1938).)をあげている。Bowley [1973], p. 116n. 19.

(21) Bowley [1973], pp. 115-116.

(22) Bowley [1973], p. 116.

(23) Bowley [1973], pp. 116-117. ボウリーはつづけてつぎのような指摘をなしている。すなわち、ジェヴォンズは、彼の『経済学の理論』における第5章「労働の理論」を、「あらゆる物の真実価格、すなわち、どんな物でも人がそれを獲得しようとするにあたって本当に費やすものは、それを獲得するための労苦と骨折りである。……労働こそは、最初の代価であった」等々のスミスの言説を賛意をもって引用することから始めた〔W[illiam] Stanley Jevons, *The Theory of Political Economy*, ... 5th ed. (1957; reprint ed., New York: Augustus M. Kelley, Bookseller, 1965), p. 167, 小泉信三, 寺尾琢磨, 永田清訳, 寺尾琢磨改訳『ジェヴォンズ 経済学の理論』(第4版の訳)(近代経済学古典選集—4, 日本経済評論社, 1981年), 125ページを見よ。]。もちろんジェヴォンズでは、労働の不変な

不効用といった考えは消え去っており、そして、労働の不効用は、ジェヴンズの労働不効用曲線として彼の分析の一般組織のなかに組み入れられている。

Bowley [1973], p. 117.

- (24) Bowley [1973], p. 117. なお、本稿(2)において以上のようにボウリーの所論を整理するにあたっては、岡田純一「近代経済学とスミス——最近の理論的研究——」(経済学史学会編『『国富論』の成立』(岩波書店, 1976年), 所収)中の「3. ボウレイの所論」の部分を、いくつかの点で、参考にさせていただいた。

M. ボウリー (1973) についての覚書

ボウリーによれば、『国富論』第1篇第4章の終わりのところでスミスは、財貨の交換価値と使用価値ということに言及したうえで、「この交換価値の真の尺度はなんであるか、すなわち、すべての商品の真実価格はいつたいなにに存するか」といったことをはじめとする交換価値についての三つの問題を列挙するのであるが、この第4章につづく三つの章、つまり、真実価格と名目価格についての第5章、価格の構成部分についての第6章、および、自然価格と市場価格についての第7章は、スミスが列挙した価値の諸問題についての一つの統合的検討たることを意図されており、また、そのようなものとして考えられるべきなのであり、そして、第5章「商品の真実価格と名目価格について、すなわち、商品の労働での価格と商品の貨幣での価格について」はまさにその表題が示すとおり、真実価格と貨幣価格との違い、価値測定の問題についての議論である、とされるのであった。

そしてボウリーによれば、いまみた第5章の表題自体が交換価値のほんとうの尺度は労働であるという『グラスゴウ大学講義』での謎めいた言説からの一つの発展を示唆しているのであるが、うえのような問題を取り扱う第5章ではスミスは真の価値尺度は「支配労働」であるということを中心とするのであり、そして、そのような考えが展開される議論のなかには投下労働が支配労働に影響を及ぼすかもしれないといったことを示唆するものも含まれてはいるがスミスはもともと価値の基礎としてもまた価値測定

の基礎としても投入実体に関心をいただいていたわけではなかった、とされるのであった。

また、ボウリーによれば、スミスは第5章の冒頭のパラグラフにおいて、個人の貧富の程度はその個人が享受しうる生活の必需品、便益品、娯楽品の量に依存するが分業の行きわたっている社会では結局、その個人がどれほど多くの他人の労働を支配しうるかということに依存するということから、所有者自身が使用しようとは思っていない商品は、その商品の所有者にとっては、その商品と交換に彼が獲得することのできる労働の量だけ値うちがあるということとなり、それゆえ、労働こそがすべての商品の交換価値の真の尺度であるとするのであるが、スミスのいう真の尺度としての労働とは、自然的資源としての労働ではなく、「労苦と骨折り」と同義のものとしての労働、不効用としての労働であった、とされるのであった。すなわち、ボウリーによれば、スミスの議論では、労働の不効用は不変でありしかもその労働の苦痛、不効用が富を獲得することの基本的なコストあるいは代価であるのであって、この意味での支配される「労働」が真の不変の価値尺度ということになっているのであり、それゆえまたそこでは、「支配される労働」というその尺度は、通常の意味での貨幣賃金や実質賃金、また、生存費といったものによってその適格性が左右されるようなものではなかったのである、とされるのであった。

なお、ボウリーによれば、スミスはこのように不効用、苦痛としての労働を真の不変の価値尺度とするのであるがスミスは他方で労働のタイプの相違による労働の不効用、苦痛の程度の相違ということの存在および労働の辛さや熟練の程度についての正確な尺度を見つけだすことの容易でないことを指摘しており、そしてこの問題に対してスミスは第5章では、不思議にも第10章での異種類労働の評価についてのより詳細な検討になんの言及もすることなしにそして正当化のための見せかけの試み以上のことをなすことなしに、実際には市場と慣習が熟練等々を獲得するのに伴う労働とといったものを考慮に入れて、異種類労働の諸量の間の換算物差しを確立す

るであろうとしている、とされるのであった。

またボウリーによれば、スミスは第5章において以上のような内容の議論に加えて、なんらかの特定の時点においてあるいはある特定の期間にわたって貨幣での労働の価格あるいは穀物での労働の価格が一定でありうるかぎりにおいて一方で貨幣が、また他方で穀物が近似的な価値尺度として使用されうる事情についての説明をしており、貨幣と穀物を比べて短期では貨幣が長期では穀物がそのような要件を相対的により良く満たしうるとした、とされるのであった。

そしてまたボウリーは、労働をして不変の価値尺度たらしめている不変な労働不効用というスミスの考えは古典派の経済学一般に受け入れられたわけではなく、また、古典派の経済学者たちが追求しようとした不変の価値尺度といったようなものはもともと入手不可能なものであるとみつつも、スミスが価値尺度として労働の不効用という心理的な概念を提案したこと自体は斬新なことであつた、ととらえ、そして、そのような労働の不効用という考えはスミスの議論の他の部分でも使用されていることを指摘するとともに、さらに、「労働の不効用」、「労働の苦痛コスト」といったスミスの考えは、後代のジェヴォンズの経済学のなかにも組み入れられているだけでなく、それはまた、「^{リアル}真実の」^{コスト}費用というイギリス経済学の伝統的な考え方の基礎を提供したのもでもあった、とするのであった。